

(四郷)天道って  
こんなところ  
「ちょっと昔の生活や文化」編



天道発展会の人たち

**天道諺言伝え編集委員会**  
**令和3年度井郷わくわく事業**



## はじめに

委員長 今井 菊男

人生をふりかえってみると、おおむね20年から30年ごとに生活が大きく変化しているように思います。まずは0歳から20歳ぐらいまでの第一年代、ここでは心身ともに成長する時代。主に学びながら人生の基礎をつくる時代です。第二年代の40歳ぐらいまでは、社会に貢献する時代。さまざまな職業で働き社会貢献をします。第三年代の60歳ぐらいまでは、あらゆる場面でリーダーとして貢献する時代です。ここまでは、子育てや仕事にがむしゃらに生活する年代であったのではないかと思います。60歳を過ぎると第四年代になります。仕事中心の生活から、人生に幅をもって生きる年代。第五世代の80歳を過ぎると人生を明らかにする時代。

私たち編集委員は、自分たちの歩んできた人生を振り返りながら、若かったときのことを振り返り、現在まで生きてきたことに感謝する次第です。自分一人で生きてきたのではなく、地域の人たちと共に生き、生かされてきたと思います。

いつの世もそうですが、昔を知ることで今を見つめなおす。そして未来を考えることが大切なのではないのでしょうか。一人一人がそれぞれの人生を歩んでいますが、その人生の集まりが天道という地域社会を形作っているわけです。

この「(四郷) 天道ってこんなところ」シリーズは、1年目は方言やことわざ 諺などを中心に、2年目は遊びを中心に、3年目の今回は、ちょっと昔の生活や文化をみつめることで、天道がより理解できるのではないかと編集し始めたものですが、区民のみなさんが楽しんで読んでいただき、天道に愛着を持ってくださればうれしく思います。特に、未来を担っていただく若い方にも読んでいただけるように平易に編集しました。どうぞお読みください。

## 目次

### はじめに

1	天道ってどういう意味なんだろう	3
2	天道の秘密を見つける雲龍寺探検	4
3	この石仏はいったい何？－街中探検	9
4	観音堂の秘密	12
5	光輪寺の秘密	13
6	交差点に石標があった！	14
7	天道の集落は旧道沿いにあった？柿野街道探検	15
8	天道の住宅はいつごろから増えたのだろうか	20
9	昔の生活にタイムスリップ	22
10	現在に続く伝統文化	30
11	変わってきた農業	32
12	ちょっと昔のお話	34
13	こわかった災害	35
14	新しい文化の創造	37

### おわりに

——みなさんこんにちは。私 ちは天道に住んでいますが、家の近くや道端に古そうなものが見られます。なんか秘密がありそうなので、探検し  
いとと思います。いろいろなことを大人の皆さんに聞いてみ いとと思います。

## 1 天道ってどういう意味なんだろう

——まず、初めに聞き いのは、天道という名前ですが、どういう意味なの  
のでしょうか。おじいさん、教えてください。

天道というのは、太陽に関係があります。お日様、つまり太陽のことを「おてんとさん」と聞いたことはありませんか。「おてんとさん」というのは、漢字で書くと「お天道さん」つまり太陽のことなのです。太陽は、昔から神様として拝められてきた存在です。これは日本だけではなく、古代エジプト文明やマヤ文明にも太陽信仰があり、両方とも太陽に近づきたいとの思いからピラミッドが造られているのです。

そのようなことから、天道という地名は他にもあり、たとえば、愛知県内では「豊田市東広瀬町天道」や「名古屋市天白区八事天道」が、県外では「大阪府吹田市天道町」、「福岡県飯塚市天道」などがあります。いわれ  
なんかを調べてみるのも面白いと思います。

もう一つの説として、仏教の六道の世界では、「地獄道」「餓鬼道」「畜生道」「修羅道」「人間道」そして天人が住む「天道」がありますが、天道という世界は、最上界なのです。

また、天道社があったので天道という地名はここから由来しているとも  
いわれています。

**一〇メモ** 四郷という地名は、4つの郷ということで、天道、下古屋、上原、唐沢のことです。(唐沢は八柱神社東あたりの地区)

## 2 天道の秘密を見つける雲龍寺探検

—なるほど、なんかすごいところですね。ところで、四郷小学校の西に雲龍寺というお寺の山門の前に雲龍寺の説明板があります。昔は籠川の近くにあつ ということですが、本当にあつ のですか。和尚さん、雲龍寺についていろいろと教えてください。

### 住民とともに移転してきた雲龍寺

雲龍寺の歴史は、今の天道の歴史そのものなのです。雲龍寺は江戸時代のはじめに衣村ころもむら（現錦町）から籠川左岸の宮下川原に移転してきました。現在の内浜化成の近くです。その地では、住民が雲龍寺を中心にして農業を営んでいました。籠川の近くに住むのは、水が得られやすいことや、土地が肥えていて作物がよく獲れるという利点があるのですが、大雨



雲龍寺の山門

で川が氾濫すると被害が出ました。何度も堤防が壊れたため、流れをまっすぐにする工事が行われ、そのとき雲龍寺と住民は高台で山林だった四郷山（お山）と呼ばれていた現在の場所に集団移転したそうです。当時の家は、昔の絵図を見ると62戸ほどのものだったようです。この集団移転は、当時の幕府三河代官の鳥山牛之助の力が大きかったようです。

**一口メモ** 雲龍寺は水月山雲龍寺といい、しょう聖観世音菩薩を本尊とした曹洞宗の寺です。嘉永4年(1627)までは衣村（現錦町）にありましたが、矢作川の氾濫に遭い宮下河原に移転しました。その後、猿投川（籠川）の流路変更工事によりさらに高台を求め、明暦2年（1656）に現在の地に移転されました。今の本堂は大正11年に再建されたものです。三河新四国霊場19番、20番としても位置づけられています。本尊の聖観世音菩薩は、開祖夕雲和尚の自作だそうです。

### 江戸時代の寺子屋

雲龍寺は、江戸時代に寺子屋としても利用されていました。今の学校みたいなところですよ。明治時代になって、寺子屋は四郷学校にかわり、明治

30年まで子どもたちの学びの場となっていたそうです。

## 雲龍寺の火災

---

大正2年（1913）に火災で本堂は焼失しましたが山門は火災を免れ、現在に至っています。その後、大正11年（1922）に本堂は再建されました。

## 雲龍寺の大杉

---



本堂の裏には、大きな杉がありました。かなり遠くからも見ることができ、雲龍寺の位置が確認できました。火災や落雷にも耐えた大杉が、平成2年（1990）の台風19号で倒れてしまい、とても残念でなりませんでした。



雲龍寺本堂全景

雲龍寺本堂に保存されている大杉

——古くからの歴史があるのですね。ところで、運動場との境にりっぱな社らしきものがあります。お宮さんみいに見えますが、あれは何でしょうか。

## りっぱな社は天道社（廣峯社）

---

あれは天道社といいます。寛延4年（1751）の井郷地区の古地図には、四郷町山畑交差点の東に天道社がのっています。明治時代になって、天道社をはじめとする四郷にあった社は、八柱神社に集められたことで中の祭神はなくなってしまいました。しかし、社の建物そのものもなくなってしまうのは忍びないと、大正時代に雲龍寺の境内に移設されたそうです。なお、天道社の



天道社

棟札が現在も残されており最古のものは明暦2年（1656）だそうです。

また、天道社にはこんな話も伝わっています。

江戸時代の初め頃、丹羽勘助氏次という伊保のお殿様がこのあたりで鷹狩りをしていたのですが、大事な鷹がどこかに行ってしまう、困ってしまいました。殿様は、近くにあった天道社に「鷹が戻ってきますように」と

お願いすると、不思議なことに鷹が舞い戻ってきました。殿様は、この社は不思議な力を持っているものだとし社領地をあたえたそうです。その後、下伊保にも鳥居を建てて、野がけ(馬に乗り走らせること、馬術訓練)の時には、必ず大鳥居からお参りしたそうです。

また、こんな話もあります。

江戸時代の中ごろ、盗人が来て、天道社のご神体を盗んで尾張に持って行ってしまいました。しかし、盗人は眠りにつくと、神様が夢枕に出てくるようになり、これはいけないことをしてしまったと恐れた盗人は、今の名古屋市の八事裏山の尼寺にご神体を預けました。この尼寺は天道社と名前を付けご神体を祀り、盗人はことなきを得たそうです。現在、八事裏山にある天道社は、三河の四郷からご神体が来たことになっているとのことです。ご神体が無くなった社は、新しく廣峯社ひろみねしゃとして祀り、大正時代まであったそうです。

**一口メモ** 天道社（廣峯社）は大正9年(1920)に八柱神社に合祀されました。

——現在は、中央こども園として多くの子が学んでいるのですが、いつごろからこども園ができ のですか。

### 中央こども園はいつから

昭和27年（1952）に中央保育園が開園し現在に至っています。こども園という名前は、豊田市の施策による変更です。

大きな出来事としては、昭和34年（1959）の伊勢湾台風で大木が倒れ、木造園舎が大きな被害を受けました。また、先代の住職（玄龍先生）は、当時珍しかった猿やワニを飼っていました。また、広い園内で弓道の練習をよくしていました。当時から天道の多くの子どもたちは、中央保育園で学びました。また、天道以外でも亀首や井上の子どもも学んでいました。



ひなまつり会

**一口メモ** 雲龍寺は江戸末期に寺子屋が開設され、明治30年（1897）まで続けられていました。教育の場としての使命は昔からあったと思われます。



——ところで、山門の前にもいろいろなものがありますが、まず、立派なお墓み いなものがあるのはなんですか。

## 宝暦義民塔



宝暦義民塔

これは宝暦義民塔ほうれきぎみんとうというものです。今から約250年程前に、江戸時代の宝暦年間（1748～1763）に飢饉ききんと言って天候が悪くて米がとれずに農民が苦しんでいる時期があったのです。当時は年貢ねんぐといって、今の税金みたいにお米を殿様にささねばなりませんでした。不作の年でも決められた分だけ出すと、自分たちの食べる米がなくなってしまうことを意味しました。そんなことをしたら、食べるものがなくなってみんな飢えて死んでしまいます。それに加え、当時はお役人の不正がまかり

り通っていたので、農民の不満が爆発し、当時参勤交代で江戸にいたお殿様に直接お願いする直訴じきそをすることになったのです。当時、直訴はご法度はつと（やってはいけないきまり）でしたが、どうせ直訴しなくても飢え死にするのならやりましょうということになり、多くの人たちが江戸をめざして行ったのです。留守を預かっている家来けらいとしては、そんなことをされたら自分たちが民を大事にしていないことが分かってしまうので、仕方がなく年貢を減らすことに同意して、ことはおさまったのです。でも直訴したことは免れず、村の代表の人が死罪になったのです。村人たちは、自分たちのために犠牲になった人たちに感謝してこの塔を作ったのです。今でも死罪になった人たちに感謝するために、毎年4月22日（死罪になった日）には供養をしています。

**一口メモ** 村人は、当時の悪政に耐え難く、宝暦2年(1752)12月3日に飯野八兵衛を中心に江戸へ直訴しました。24か条の訴状には、丈量じょうりょう（測量のこと）縄や杵の不正規格や城普請請人夫使役について取り上げられており、1241人の百姓が岡崎城下に向かいました。首謀者であった四郷村の庄屋小栗紋右衛門、山田林右衛門ら6人は斬首されました。以前はおためしのあった5月14日に法要を行っていましたが、現在は4月22日（処刑された日）に行っています。

——そのような出来事があって、今の私たちの生活があるのですね。その隣に小さなお堂らしきものがありますが、あれは何ですか。

### 山門の横にあるお堂の十一面観音様

中に入ると真ん中に本尊である十一面じゅういちめん観音菩薩かんのん ぼさつがあります。そこには寛政2年（1790）と刻まれています。残されている記録によると、建てられたのは雲龍寺再建頃の大正12年（1923）とされています。また、観音堂の位置ですが、現在は山門の右にありますが、明治5年（1873）の雲龍寺絵図では、観音堂の位置は山門の左に画かれています。再建の時に移設したのかもしれませんが。



観音様のお堂



——本堂前に先が尖った石塔がありますが、あれは何でしょうか。

### 飯田街道にあった念仏塔

この石塔は、昔からここにあったものではなく、飯田街道沿いにあったものなのです。四郷小学校南に三叉路があり、橋の改修の際に移設されました。徳本上人の筆によるもので「南無阿弥陀佛」と書かれています。

**一口メモ** この三叉路には松の大木が3、4本立ち並び、「とくおんさん」とも呼ばれていました。徳本上人は、岡崎の「くほん院」というお寺の2代目の住職で、この場所にいたのは3代目の「くどうさん」でしたが地元では「とくおんさん」（徳本さん）と呼ばれていました。彼はこの地に立って、善光寺道を行きかう人々にある時はお金を、ある時は物を恵んで旅人の無事を祈り励ましていたそうです。「くどうさん」は天道から知多に嫁がれた人の息子で、仏門に入り修行されたそうです。

—— くさんのことを教えていただき、ありがとうございます。天道にはもっともついろいろな秘密がありそうですね。地域の人といっしょに町探検に出かけて調べてみましょう。

### 3 この石仏はいったい何？

——四郷小学校南の交差点にやってきました。なにやらほこら祠があります。あの中には仏様らしき方が座ってますが何でしょうか。

#### 役の行者さんってなんだ？—えんのお角とは



役の行者像

これは、えんのぎょうじや役の行者さんです。地元の人は「老人さん」と言っていたようです。本当の名前は「えんのおづぬ」といって、全国各地を歩いた修験者の像なのです。役の行者様是全国的にも有名なお方ですが、いつごろからここにあるのかはわかりません。たぶんこの飯田街道を歩かれたのではないかと思います。外側の祠は、昭和12年代に造られたもののようです。

—**一口メモ** えんのおづぬ 役の小角が正式名。奈良時代に山岳を舞台に活躍した呪術者です。なぜこの地に祀られたかは定かではありません。江戸後期に建立されたと推定されています。

——ここは飯田街道なんですね。その横にはむずかしい文字が書いてある石塔がありますが、あれはなんでしょうか。

#### 庚申塔とは何か？—庚申講

あれは、こうしんとう庚申塔と言います。昔は、庚申様をお参りする風習がありました。天道でも庚申講があり、かみ上で6軒、しも下で6軒が毎年庚申にあたる夜に講仲間が当番の家に集まり、お参りをしました。（年6回庚申の日がある）また、うるうとし閏年の年末の庚申の日に、庚申塔前に集まり、お寺さんをお経をあげ、お供えをして供養していました。しかし、会員減少により、平成28年にとりやめになりました。



庚申塔

—**一口メモ** 明和7年（1770）寅10月に建立。かみ上は飯田街道より北の山畑地区、しも下はそれより南の天道地区のことです。

——昔は、いろいろな風習があつ のですね。今度は、天道区民会館の方に行きましょう。お墓の入り口に石仏がありますが、これはなぜこんなところにあるのですか。

### お墓に通じるお地藏さん



お地藏さん

これは、天道のお墓に通じる道しるべとしてのお地藏さまです。ここ以外に、100mほど西にもあります。墓地への行き先としての目印であったと思われます。

—**一口メモ** 寛政7年（1795）  
2月15日建立

——区民会館の東の住宅地に、フェンスに囲まれ 石塔がありますが、あれは何ですか。

### 山の神が住宅地にあった！

あれは、「山の神」です。なぜ、こんな住宅地に山の神があったかという、昭和40年の頃は、このあたりは家がなくて、柿畑だったのです。山の神では、どんど焼きをやっていました。どんど焼きというのは、正月明けにお正月に飾ったしめ縄を持ち寄って燃やし、その火で鏡餅を焼いて食べ、1年間健康で過ごせるように願う行事のことで、左義長とも言われています。現在は住宅に囲まれているので、ここでは火を扱うことができず、八柱神社をお借りして行っています。



山の神

—**一口メモ** 山の神は、<sup>おおやまづみ</sup>大山祇の命を祭神とし、春には田の神となつて山を下り、秋の収穫が済むと山に帰るとされ、<sup>ごこくほうじょう</sup>五穀豊穰の神として<sup>あが</sup>崇められています。山の神の祠前の広場で旧暦の11月7日に子供たちによる「山の講」の祭りが行われました。子どもたちが集めた稲わらや枯葉を山積にして、翌日の夜明けとともに燃やしました。山の神に供えた「おしろこ餅」を焼いて食べる子どもたちの行事でした。おしろこ餅とは、「白米を一夜水に漬けて、すりばちで搦って、つと（藁の包み）を作って入れたものです。

——Kさんの家に、<sup>ほこら</sup>祠がありまし が、あれはなんでしょう。

## 家の敷地に祠がある！

旧家には、敷地内に祠がある家がけっこうあります。Kさん宅の竹藪にはお稲荷さんがいます。Sさん宅の石碑には「法華」の文字があり、江戸時代のものだと思いますが、よくわからないそうです。Yさん宅には、妙見菩薩、弘法大師、山の神が祀られており、昔から家を守ってくださっていると大切にされているとのこと。



Yさん宅の神様

——天道西ちびっこ広場西の林の中に小さな祠がありますが、あれはなんでしょう。



林の祠

天道西ちびっこ広場は、以前ここにあった「にごり池」を埋め立てて造った広場です。ここは、子どもどころ、魚釣りをして遊んだものです。フナがよく釣れましたが、アメリカザリガニや時にはオイカワが釣れました。林の中の祠は、大事な水に感謝する水神様のようなものだそうです。

**一口メモ** この池の北にあったS家はお酒をつくっていて、そこから流れ出た米のとぎ汁を溜める池でした。当時は「にごり池」と呼んでいました。その後にごり池は、雨水を水源とした溜め池として農業用水の源になり利用されていましたが、土地改良事業により必要がなくなり、埋め立ててちびっこ広場となりました。現在、ちびっこ広場の下には防火用水槽があります。

## 4 観音堂の秘密

——四郷町山畑交差点から西に下って下古屋方面に行く坂道に観音様が立っている建物がありますが、あれは何でしょうか。



観音菩薩

あれは、観音堂と呼ばれているお寺です。今はだれもいませんが、以前は庵主さん<sup>あんじゅ</sup>が住んでいました。私たちは、庵主さんに習字を教えてもらっていました。この観音堂は、江戸時代の絵図に載っていることから、250年前からあったと思われます。長寿寺とも呼ばれており、庵主さんは亀首の庵寺も兼務しておられました。最後の庵主さんが亡くなられて20年ほどたっているのでしょうか。玄関前の観音様は、信者の方が寄贈されたものです。

**一口メモ** 東広瀬落城の時に城主の二男近藤志右衛門が天文17年(1548)に観音堂を建立し、その後明治43年1月にこの地に移築されました。庵主は岡田礼林→芳傳→順芳→順孝

江戸時代の初期には、拳母藩の年貢の取り立て場所だったそうです。明治維新後は役場として使われていて、新役場が東畑(現在の猿投コミュニティセンター)に移ると集会場として利用されていました。

——正面階段の横に くさんの仏像があるのは为什么呢。

あそこには33体の石仏があります。あの仏様は、弘法大師さまです。以前は、下古屋の籠川と豊田高校の間にある「お鋤山」という場所に下古屋の弘法さんといっしょにあったのですが、土地の所有者が変わったので、それぞれの地区で管理することになり、天道地区ではこの観音堂に移設されたそうです。



弘法さん

——観音坂の墓地に石を5個積んだようなお墓がありまして、あれはなんですか。

### それはとても古い五輪塔（墓石）だった

これは天道で一番古いもので、時代は室町時代約450年前のもので。

**一口メモ** 明治末期、お鎌山全体に88の祠ほくらを造り、弘法さんの石仏を安置しました。麓には本堂も造られ親弘法の像を祀っていましたが、昭和38年（1963）に土地の所有者変更により、下古屋は延命寺に、天道は観音堂に安置されることになりました。毎年旧暦の3月21日の弘法さんの命日に関係者がお参りしています。

## 5 光輪寺の秘密

——天道には、南の方にも光輪寺がありますが、どんなお寺でしょうか。

ここは、明治17年（1884）浄土真宗大谷派の四郷説教所として認可され、住民の集会の場になっていたそうです。その後、明治27年（1894）に山畑に移築されたようですが、昭和5年（1930）に現在のこの地に戻り、寺号を得て浄土真宗大谷派光輪寺として開寺されました。三河地方は、浄土真宗が広く信仰されており、親鸞の教えを請う人たちが多くいたのではないかと思います。



光輪寺



## 6 交差点に道標があった！

——四郷町山畑交差点に、石柱があります。なにか字が書いてありますが、あれは何でしょうか。

### 飯田街道の道標にはなんと書いてある？

この石柱は、飯田街道の道標です。今でいう交通案内板のようなものです。交差点では、どちらに行ったらよいかわからないので、道先が分かるようにこのような柱を立てたのです。

飯田街道は、名古屋から長野県飯田市にいたる道で、今の国道153号線のもとになった道です。国道は、豊田市内を通っていますが、飯田街道は、四郷を通っていたのです。塩の道として、とても重要な街道でした。伊保から下古屋の浦野酒造横を通り、観音坂を上がって交差点で北に向かい、今度は70mほどで東向きに御船方面に向かうこととなります。旅人が道をまちがえないように、この交差点とすぐ北の曲がり角に2本作ったのです。でも、今は1本しかありません。無くなったもう1本は豊田市郷土資料館に移設されています。



飯田街道の道標

**一口メモ** 嘉永3年(1850)に建てられたもので、3つの面には今の漢字に直すと「右・伊勢 宮 名古屋道」「左・善光寺道」「左・岡崎道」と書かれています。本来は交差点の南西側にあったのですが、道路拡張により現在の位置に移動しました。もう1本の郷土資料館に移設された道標には「右 名古屋 伊勢道、善光寺 足助道 左・木曾道 岩村 野道」と書かれています。



## 7 天道の集落は旧道沿いにあった？ 柿野街道探検

——おいでんバスが走る道は、古い通りのようですが、この通りには多くの秘密があるのでしょうか。

明治時代のはじめまでは、四郷地区の中心は飯田街道と柿野街道が交差する観音堂東の交差点付近（四郷町山畑交差点）であり、この交差点から北の道路沿いには多くの店が軒を連ねていました。なお、集落は柿野街道西側沿いにあり、東側には雲龍寺・天道社以外に家はありませんでした。

その後明治15年（1882）に新道が建設され、猿投町役場が東畑交差点北に設置されるなどにより、猿投町の中心が移動しました。

——では、現在の柿野街道の通りは、どうなっているのでしょうか。うどん屋のまるやさんの南に石の塔がありますが、あれは何でしょうか。

### 常夜燈は防犯灯－秋葉山、秋葉講

これは、石でできた昔の灯籠です。「秋葉山」と書いてありますが、これは、主な街道にあったもので、街道の目印として置かれており、夜になると蠟燭ろうそくを灯して道を照らしていたのです。今でいう防犯灯のようなものと考えればよいでしょう。天道にはここしかありませんが、下古屋の浦野酒造の東にも同様の常夜燈があります。

さて、秋葉山と書いてありますが、これは秋葉信仰に基づく火の神様をお祀りしています。常夜燈は、明かりという大事な役割がありますが、当時は、木造家屋で火を扱いましたので、火事が絶えなかったのです。そこで火の神様にお願いして、火事にならないように守ってもらっていたのです。天道自治区では、現在でも毎年12月の上旬に常夜燈の前でお参りをしています。



秋葉山火の見櫓

一口メモ 享和3年（1803）9月に地元有志が建立。

秋葉山というのは、今の静岡県浜松市の北に位置する山で、そこには秋葉神社がまつられています。そこでお参りして、お札をいただいてきて、台所のくど（火をたくところ）の近くにはっておくと、火事にならないといわれていました。しかし、秋葉神社にお札をいただいでくることは、今のように車で簡単に行くようなものではなく、歩いて往復しなければいけないので、時間とお金がかかりました。そこで、当番で村の代表を決めて、お札を授かってくる「講」という組織が生まれたのです。天道では、現在も秋葉講に入っている家庭が50軒ほどあります。当時は、毎月寄り合って、黒い箱（灯明箱）の中にもろうそくを立て、各家でお参りをするので、火事を出さないように気をつけていたのです。現在は、自宅でもろうそくをつけて各自でお参りをしています。

「講」は、秋葉講の他に御嶽講もありました。御嶽講は長野県の御嶽山の神様を信仰する人たちのグループで、他にも伊勢神宮にお参りする「伊勢講」というのもあったようです。



一口メモ 常夜燈の一番下の段には窪んだ穴がいくつかあります。なぜこんなところにあるのかは、わかりません。子どもの頃にこの穴に草を入れてとんとんと突いて遊んだことがあるそうです。

——なるほど、常夜燈から当時の生活が見えてくるのですね。常夜燈の横に鉄塔があるのですが、あれは何でしょうか。

## 火の見やぐら

これは、火の見櫓やぐらです。昭和30年（1955）に完成しました。昔は消防署というものがなく、火事になるとみんなが協力して火を消していたのです。火事が出ると消防団の人が火の見櫓やぐらに上がって、先に付いている半鐘はんしょうを「カンカンカン カンカンカン」と鳴らして火事を知らせていました。昔は当番で上に登って火の見張りをしていたのかはわかりませんが、火消し役として「消防団」という組織が編成されており、現在も続いています。



火の見櫓



消防団員

**一〇メモ** 火の見やぐらの寄附銘版には、「田財貞三、水谷金松、鈴木政治、蓮尾弘恵、鈴木彦五郎、伊藤岩男、赤川二郎、加藤博、山内鍵、今井光太郎、月山久太郎、澤田来、磯村鏡三、近藤貴一、吉良屋商店、萩原勝治」の16名が載っています。

——まるやさんの北の家端に木の柱があるのですが、このような柱をちよくちよくみかけますが、あれはなんですか？

### 自治区の放送で使っている木の柱の秘密－有線放送とは？



線放送の木柱

あの柱は、昭和30～40年代（1955～1975）にあった有線放送の柱です。今の電話は携帯電話が当たり前で、電波を使って通信をしています。しかし、当時は電話専用の線を引いていました。しかし、電話回線を引くのは大変お金がかかるので、お屋さんぐらいにしかありませんでした。そこで農協が有線放送というしくみを取り入れて電話のかわりにしました。電話機からは農協からのお知らせや地域の話題を朝晩流していたので、地域放送の役割も担っていました。この有線放送は、放送していない時には、電話としても使うことができました。

ただ、8軒に1本の電話回線になっており、だれかが電話していると他の人は使えませんでした。地域の共同電話みたいなものでした。

今では有線放送はなくなり、この柱を利用して天道自治区放送の線の中継しています。よく見ると、細い線がつながっているでしょう。それをたどっていくとスピーカーがついていて、そこから音声が流れるようになっています。豊田市からの防災情報も自動的に流れるようになっています。

**一〇メモ** 有線放送は、農協が管理していました。放送は、早朝、正午・夕方・夜の4回にわたって行われ、農協からの連絡・学校紹介・時事ニュース、緊急ニュースなどが流されていました。

——そうなんですか。おいでんバスが通る道路は、道が狭いけど、まだくさんの秘密がありそうだね。よくみると、今はやってないお店屋さんらしき家があるのですが、この通りにはお店屋さんが くさんあつ のでしょうか。

## 猿投銀座通りがあった 昔の商店街

この通りは、以前はとてにぎやかな商店街でした。現在は、店じまいをして商店はわずかになってしまいました。昭和30年（1950）頃は多くの店があり、猿投銀座通りと言って猿投町の中心街だったので。全国で流行していた鉄骨のアーケードもありました。現在のように、スーパーマーケットやホームセンター



商店街

などの大規模店舗はありませんでした。生活に必要な物は、近くの専門店で購入していました。天道には食品、衣類、器具販売、理美容など、さまざまな分野のお店があったので、天道以外の多くの方が訪れました。



福岡製麺のトラック

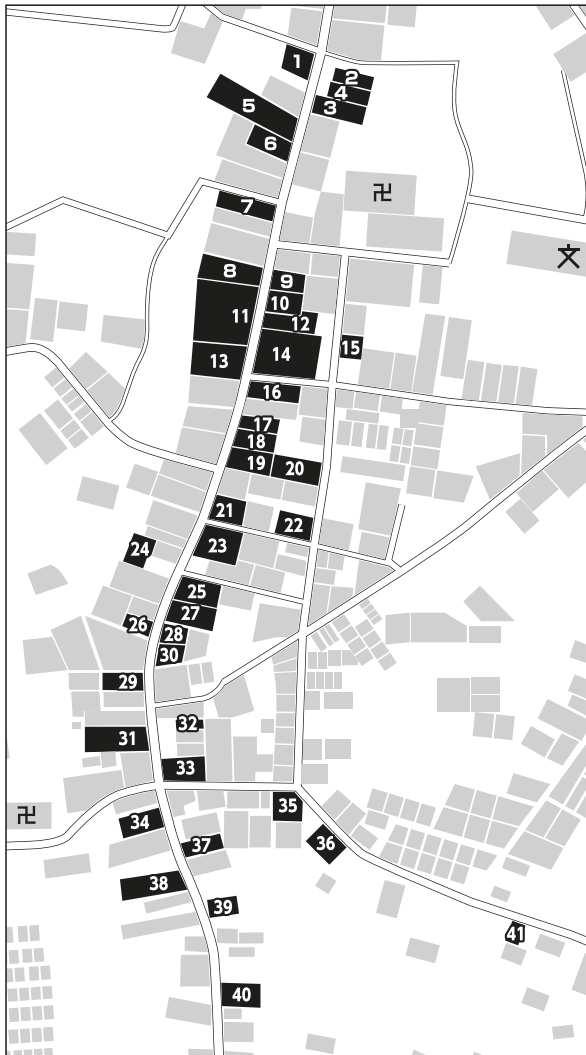
しかし、その頃の道路はまだ舗装されていなかった。晴れた日は砂ぼこりがひどく、雨が降ると道がぬかるんで、車の泥はねがすごかったです。時々、ブルドーザーが道をならして行くのですが、かえって石がごろごろして、私たちは「道路こわしが来た」と言っていました。

夏になると床貫商店でかき氷を食べるのが楽しみの一つでした。当時のカレーライスは、ヤマカ魚店で売っていたクジラ肉を入れてオリエンタルカレーを食べていました。

また、赤川歯科、萩原接骨院、伊藤医院が天道で開院されていたので、よくお世話になりました。伊藤医院は、往診もしてくださり、熱が出ると注射を打ってもらいました。

その頃は次の図のような商店街がありました。

**一口メモ** 猿投村商工会は昭和13年10月に発足しました。天道の会員として今井光太郎（下駄商）、蟹芳雄（菓子商）、加藤鉦一（百貨店）、鈴木彦五郎（百貨店）、鈴木庫次（金物商）、杉浦和作（運送業）、福岡弥三郎（製麺業）、磯村伊之一（物品販売業）、加藤義一（物品販売業）、月山銀市（物品販売業）、近藤瀧次（小間物商）、山田秋治（洋服店）、近藤貫一（理髪業）、小栗兼造（牛馬商）、鳥山良一（運送業）らの名が連ねています。



## 昭和40～50年 ごろの商店街

- 1 旭屋
- 2 中野理容
- 3 山一宝石店
- 4 柳瀬靴店
- 5 三黨商事
- 6 プラム美容室
- 7 瀬戸洋服店
- 8 加藤編み物教室
- 9 羽根田建具店
- 10 片山一星堂
- 11 郵便局
- 12 柴田屋呉服店
- 13 萬清百貨店
- 14 水戸住建
- 15 加藤雲泉堂
- 16 床貫商店（床屋）
- 17 石井プリキ店
- 18 ㊤タタミ店
- 19 月山薬房・月山美容院
- 20 月山洋服店
- 21 みどりヤクリーニング
- 22 杉浦商店
- 23 鈴木金物店
- 24 福岡製麺（まるやうどん）
- 25 ヤマカ魚店
- 26 沢田ラジオ店
- 27 鈴木食料品店
- 28 今井履物店
- 29 今井ガス
- 30 丸吉堂
- 31 鈴彦商店
- 32 たまき
- 33 鈴彦農機
- 34 ヤマ美容室
- 35 サナゲ印刷
- 36 カトウ理容
- 37 野々山肥料
- 38 マルキプロパン
- 39 菊の屋
- 40 梅村管工
- 41 志賀酸素

## 8 天道の住宅はいつごろから増えたのだろうか

——区民会館集会室に昭和50年ごろの地図がはってありますが、現在とずいぶん異なっています。地図の中にある鈴菊製陶という会社がのっていますが、今は住宅地になっています。当時の様子を教えてください。

このあたりは林や畑だったので、昭和38年（1963）鈴菊製陶ができました。当時、時代の流れで石炭の利用が減り、炭鉱で働いていた九州の人たちが鈴菊製陶に働きにやってきました。工場では、タイルが作られており、製品の多くは輸出されていま



鈴菊寮（昭和47年以前）

した。しかし、昭和48年（1973）にオイルショックがおきて世界中の景気が悪くなり、倒産してしまいました。その後、チェリータイルが引き継いだのですが、長くは続きませんでした。そして、工場の跡地にC Iハウスと呼ばれる分譲住宅ができました。その後、昭和50年（1975）ごろに積水ハウスが分譲されました。このころからトヨタ自動車がどんどん成長し、多くの人たちが豊田市に転入してきました。畑や丘が住宅地にかわっていったのです。



C I 宅地造成  
（昭和46年ごろ）

また、地元の方は、昭和43年（1968）ごろより畑を親より相続するなどして家を建てました。当時の建物は若い家族向きで、建坪は20坪ぐらい、車庫は2台分、青、緑、赤などの瓦屋根が多かったものです。玄関も木の引戸からアルミドアへ、窓はアルミサッシになってきました。そのころのアルミサッシは、薄いグレー色が多かったです。家が増えるにつれ、北は北海道、南は九州・沖縄まで全国の人たちが住むようになりました。

現在の猿投コミュニティセンターの場所には、猿投町役場や猿投公民館がありました。その東には、結婚式や披露宴ができる広い座敷のある公民館や助産所がありましたが、昭和50年（1975）ごろになくなりました。

四郷小学校東の集落も昭和42年（1967）頃に当時の旭村に矢作ダム建設のため、水没する家庭が13軒移転してきました。現在は矢作ダムから取水した水のおかげで不自由なく水が使えるのですが、そうした人たちのおかげで今の生活が成り立っているのです。

天道周辺の、人口増加に伴い昭和50年（1975）に四郷小学校が、昭和61年（1986）に井郷中学校が開校しました。それまでは青木小学校と猿投南部（現猿投台）中学校に通学していました。当時の通学路は、猿投駅周辺の住宅を通り過ぎると畑や雑木林で、小学生の時は、遊びながらよく道草をして帰ったものです。当時は学習塾はなく、習い事はそろばんぐらいで、家に帰ったら「遊びが仕事」でした。前冊（昔の遊び編）で紹介したようないろいろな遊びをしていました。





## 9 昔の生活にタイムスリップ

——50年ほど前の生活はどうなっているのだろうか。おじいさんやおばあさんに聞いてみまし。

### 水を得るために－井戸水（井戸仲間）から簡易水道へ

天道は、下古屋地区に比べて高台なので、洪水になるという災害はなかったのですが、生活に必要な水を得るには大変だったのです。昔は、井戸を掘って地下水を利用していました。高台なので地下水をくむことができる地層にあたるまで深く掘る必要があり、特別の職人さんが井戸を掘ってくれました。しかし、井戸を掘るのが大変なことから、一つの井戸を何軒かで共同で利用するところもありました。そういう家を「井戸仲間」といって仲良く暮らしていました。井戸水の温度は、ほぼ一定で夏は冷たく感じられ、スイカを冷やすのに好都合でした。

昭和37年（1962）頃から水道を引く計画が出て、役場が中心になって簡易水道を通すことになりました。水源は、今の高町の高台で、地下水をくみ上げて、塩素殺菌をした程度の水道でした。しかし、蛇口をひねると水が出るようになって、画期的に便利になりました。

——天道区民会館のすぐ東にお墓がありますが、お墓について教えてください。

### 天道墓地を調べてみる－銘木指定のアベマキ



葬儀後に墓地に行く様子



天道墓地のアベマキ

当時は天道集落の東はずれにありました。今では住宅開発とともに天道の真ん中になってしまいましたが、当時は街路灯はなく、真っ暗で薄気味悪いところでした。昔は、人が亡くなると今のように火葬ではなく土葬で



とむら  
吊っていました。土葬では、亡くなった人を棺桶かんおけ（ひつぎ）ごと土に埋めていたので、子どもの頃は、死人が生き返ってくるのではないかと気味悪がっていました。時には火の玉が飛んでいたなどと聞くと、一層気持ち悪かったものです。

土葬から火葬になると、今の大きな木の下に死体を焼く場所ができて、茶毘だびに付すようになりました。猿投町の時代には、上原に火葬場がありましたが、豊田市に合併されると、古瀬間町の火葬場を利用するようになりました。

今は葬儀場で葬式をするのが当たり前ですが、昔は葬儀場はなく、自宅で行っていました。近親者以外の人屋外で焼香をし、雨の日は傘を差してのお参りでした。また、多くの人がお参りに来るので、準備をするのが大変でした。炊き出しをしたり、葬式の飾り物を作るのは、組の人が総出でしてくれました。「困ったときはお互い様」の精神で、それだけ近所付き合い合いが濃かったのです。

葬儀が済むと、白い装束で頭に三角の白頭巾をした喪主を先頭に、親戚一同が並んでお墓に行きました。その行列が通り過ぎる時には、みんなは手を合わせてお参りをしました。長生きした人が亡くなると大往生だいおうじょうといって、よく生きたという感謝の気持ちを込めて、竹で編んだ籠にお金を入れて、道外れまで来ると、籠を振ってお金をばらまきました。子供たちは、それを拾って小遣いにしたものです。

葬式が終わると、7日ごとにみんなでお参りをしました。



念仏塚

**一口メモ** 現在、念仏講はなくなりましたが、天道墓地にある念仏塚では、旧うるう年の12月に念仏講の関係者によっておまいりが行われています。

— お墓の入り口に石塔がありますが、あれは何でしょうか。



西国三十三所

字を読むと「西国三十三所」と書いてあります。観音信仰で霊場巡りをしていたと思われます。西国三十三所巡りは、関西地方を中心にある33の観音様をお参りすると、幸せになるという信仰で、四国八十八か所巡りみたいなものです。その隣にあるのは六地藏です。その左右に3体ずつ並んでいるのは地藏菩薩です。これは、この世とあの世の境界にお地藏様を置き、神聖なお墓に悪霊が侵入するのを防ぐためといわれています。



六地藏

**一口メモ** 天道墓地は、明治時代に杉浦家が天道の住民へ墓地として寄付されましたが、墓地の管理者は当時の天道の住民全員で登記をしていました。現在では、お墓のある方が年2回お墓掃除をしています。

土葬の時代は、両墓制といって人里から離れた山林に遺体を埋葬するお墓と寺院のお墓を一つずつ作る習慣がありました。二つもお墓を作った理由として有力な意見は、死の観念や遺体恐怖から人里離れた場所に遺体を埋め、人の住む場所の近くや寺院境内に死者供養のための石塔を作ったというものです。

——昔の人は、幸せになる めにいろいろな信仰をしてい のですね。そのほかにはあつ のでしょうか。

### 今はなき信仰の数々ー御嶽講や百万遍

<sup>おんたけ</sup>御嶽講は、泊りがけて御嶽山に行っていたようです。<sup>せんだつ</sup>先達という案内役に連れて行ってもらっていました。



御嶽山でのお参り  
平成 18 年 (2006)

ー口メモ S邸にあった御嶽講の碑は、八柱神社の社務所の南に移設されています。

その他に、<sup>ひやくまんべん</sup>百万遍という信仰がありました。これは、大きな数珠をみんなを持って、ぐるぐると数珠を回しながら、「南無阿弥陀仏」とお経をとなえました。この数珠は、観音堂にあるのではないかとされていますが、定かではありません。そのほかに伊勢講（三重・伊勢神宮）、善光寺講（長野・善光寺）などもあったようです。

### 食べ物を自前で作っていた！ー味噌や漬物

昔は、今のように海外からの輸入品はほとんどなく、自給自足でした。このあたりで作っていたのは、味噌や漬物などでした。当時は冷蔵庫がなく、保存食として乾かしたり、塩づけ、発酵などで保存食を作っていました。



梅干を作ったカメ

### 桑の木があちこちにあるのはなぜ？ー蚕の食べ物だった

このあたりは、<sup>ようざん</sup>養蚕がさかんでした。現在の豊田市駅の西に<sup>かも さんし</sup>加茂蚕糸という工場があり、各家庭で<sup>かいこ</sup>蚕を飼っていました。蚕の食べ物になるのが桑の葉です。桑の畑もありました。桑の木には真っ黒に熟すととても甘い桑の実ができ、よく食べました。また、こどもたちは、蚕を顔や腕などにのせて遊んでいました。

**一口メモ** 大正から昭和30年ごろまで養蚕がさかんになり、畑の多くが桑畑まゆになりました。蚕は「ハルコ」「ナツコ」「アキコ」と言って年に3回繭まゆをとりました。居間に棚を作って竹ザルで飼いました。重要な現金収入でした。

## 天道にも虫送りがあった！－子供会の行事－

6月ごろになると、水田にウンカなどの害虫が発生します。その被害にあわないよう、虫送りの行事がありました。猿投神社を出発し、各集落をリレーして南下します。天道の子どもたちは、亀首の子供会から手渡したいまつで松明をもらって、亀首の境から大通りを下り、四郷交差点を南に下って、上原の子供会に手渡しをしました。

—昔は、いろいろな組織がありまし が、子供会、青年会、婦人会、商工会、実行組合（農事組合）などはどうなってしまう のでしょう。

子供会は今でも活動していますが、当時は公会堂で集まりがありました。上原の山田しゅぜんという庵主さんがきて、初めに般若心経を唱えて、子供会の歌を歌ったり遊んだりしていました。

また、幻燈げんとうといって、昔話や童話などのスライドを白い布に映して物語を見せてもらったり、紙芝居をみたりしました。

**一口メモ** 公会堂は、現在の四郷町山畑交差点から50mほど東にありました。現在の区民会館的な場として、会合や野菜出荷場などの多目的施設として活用されていました。現在の区民会館の建設時に売却されました。



青年会の解散時の写真

青年会、婦人会、商工会は、現在は存続していません。当時は、中学校を卒業すると就職するのが当たり前で、だんだんと参加する人が減ってしまいました。青年会は、中学卒業をすると入会しましたが、会合に出席できずになくなってしまいました。

婦人は、その後女性部に替わりまし

たが、炊き出しなどをしたり、敬老会の出し物をやっていました。

実行組合は、農業従事者の集まりで、現在の農事組合として存続しています。



婦人会の出し物

## 楽しみにしていた行事 おためし、屋外映画、四九市など

楽しみのひとつとして、いろいろな行事がありました。5月になると、商工会のみなさんが熱田神宮の「おためし」に行き、それをもとに雲龍寺の境内で再現したのが天道のおためし行事です。みんなが集うように多くの露天商が立ち並び、苗木や金魚を売っていました。また、商工会のくじ引きもありました。60年間続いたおためしは、平成25年（2013）を最後に行われなくなりました。



おためしの飾り物

また、年に1回ぐらいは公会堂や雲龍寺や八柱神社などで映画会が開催され、時代劇を見たりしました。

また、4と9がつく日に開かれる「四九の市」と呼ばれた朝市が雲龍寺前の通りで開かれていました。花木、野菜、ドジョウ、五平餅、雀の焼き鳥、洋服、魚類などが売られていました。



おためし開催時のようす

**一口メモ** おためしは、熱田神宮の「花のとう」と呼ばれる豊年祭で5月8日に飾り物の出来具合により農家の人々が自ら作柄を占うというものです。天道では5月9～11日に展示されたものを模して5月13～15日に雲龍寺境内に飾り物を作りました。天道では昭和28年（1953）からはじまりました。人形は、向かって右が春宮飾り、左は秋宮飾りでそれぞれ春と秋の作物の飾りが並んでいました。それぞれの中央に青、赤、白の神様が三体並び、赤の神様が真ん中にいると日照りが続く、白の神様が中心だと曇りが多いなどと、見た人がそれぞれ判断し、種まきや苗植えをするというものです。平成3年には古くなった屋形や人形を作りかえたとのことでした。

## 家にやってきた行商人

---

当時は、大きな店がなかったので、行商人や訪問販売がありました。魚売り、富山の薬、掛け軸、野菜売りなどの方がやってきました。

おもしろかったのは「ロバのパン屋」です。ロバが車をひいて音楽が聞こえると珍しかったので、親におねだりしてふかしパンなどを買いました。そのほかにもオリエンタルカレーやコーラの宣伝カーがきました。

アイスクャンデー屋さん、夏になると自転車でカネをカラーンカラーンと鳴らしながら売りに来ました。甘くておいしかったです、とても硬かったです。

宮口のパカン屋さんが来ると、お米と砂糖、しょうゆを持って行き、ポン菓子を作ってもらいました。釜を熱してしばらくすると器械を止め、蓋を開くとポン菓子が金網に瞬時に出て、「ドーン」（パカーン）という音がしてびっくりしました。米菓子はとてもおいしかったです。

紙芝居屋も時々やってきました。紙芝居を見ながらラムネ板（カタヌキ）にスプーンで穴を開け、穴に10円玉が通ったらご褒美のお菓子がもらえました。

## 当時の食べ物や季節に合った食べ物

---

昔の生活は現金収入が少ないため、卵や乳を得るため家でニワトリやヤギを飼っていた家が多くありました。時にはご馳走を作るためニワトリを自分でさばいて肉料理を作る事もありました。

夏の涼を得るための飲み物として、コココーラが日本に入ってくる以前はシトロンソーダでした。作り方は粉末のシトロンソーダをグラスに入れ

水に溶かして飲みます。ほかにもコーヒー味のものなどがありました。

食べ物のほかに夏には蚊帳かやはなくではならぬものでした。冬には暖をとるために焚火たきびをはじめ、炭を足元に入れた囲炉裏いろりが一般的でした。寝るときは、お湯が入ったブリキ製の湯タンポを布団の足元に入れて、暖をとっていました。

## **天道に国鉄バスが走っていた！**

---

四郷地区は、交通の要所でした。今のおいでんバスの前の時代は、名鉄バスが拳母駅（現豊田市）から上仁木まで運行していました。また、国鉄バスも東豊田駅と柿野温泉間で運行されていました。このバスは朝夕に一本ずつあり、天道公会堂前にバス停があったため、高校の通学にはとても便利でした。また、四郷交差点には、東西のバス路線があり、平戸橋一名鉄バスセンター路線がありました。信南交通の急行バスは名鉄バスセンターと長野県飯田市をつないでおり、四郷でも乗車することができました。省営（国鉄バス）は、瀬戸追分—岡崎駅間で運行されており、岡崎や瀬戸に出かけるのに便利でした。バスは、今のようなワンマンバスではなく、乗車扉を開け閉めしたり切符を売る車掌さんがのっており、ボンネットバスも走っていましたが、車社会の波と昭和63年（1988）愛知環状鉄道の開通とともに廃止されてしまいました。



## 10 現在に続く伝統文化

——夏休みになると区民会館広場で棒の手の練習をしています。あれはなんですか。

### 棒の手ってなんだ？ いつから続いていたの？

棒の手は、戦国時代に農民に槍術などを教えたのが始まりで、その後武芸としてお祭りや演技をするようになりました。昭和35年（1960年）頃、棒の手の復活運動がはじまり、小中学生が中心となって棒の手を習い始めました。天道は鎌田流が伝承されてきました。9月になると公会堂で集まって練習しました。中学生の刃物の演技は見ていてすごいなあと思いました。



昭和50年ごろ、天道公会堂前で

公会堂がなくなると、雲龍寺の運動場で裸電球をつけて薄暗い中で練習をしていました。区民会館ができた後は、練習会場は現在の広場になりました。

お祭りが終わると、お小遣いをもらうのが楽しみでした。また、反省会として、ヤマカの大広間で料理をいただきました。

夏休みには、貸し切りバスを仕立てて、猿ヶ島に海水浴に行ったことがありました。また、当時は猿投祭りでも演技していたので、昔の人のように猿投神社まで歩いて行ったことがありました。



Tさんの馬

現在の警固祭りは、馬を借りて実施していますが、昔は、Tさんが飼っていた馬を使っていました。馬具は馬の塔といって立派なものでしたが、現在使っているのは新しく新調したものです。



鉄砲（火縄銃）は、以前はやっていたのですが、しばらく途絶えていました。しかし、Sさんの功績により火縄銃が復活し、りっぱな警固祭りができるようになりました。

## その他のお祭りの行事はどうなってるの

---

棒の手のほかに、天道では子供会が中心になって獅子舞やみこしが家庭を練り歩いています。八柱神社では、小学生が巫女舞をやっています。

本祭の前夜には、試楽（今の前夜祭）として七度参りをしました。これは、現在も続いていますが、当時は青年団が提灯ちようちんを持って境内を練り歩きました。

余談ですが、昔は、お祭りになると大人は親戚の人や職場の仲間を家に招き、にぎやかにお酒を飲んでいました。

## 天王まつり

---

「おてんのさん」と呼ばれていました。提灯を持った子供たちが七度参りに出て、そのあとは花火が打ちあがったのを見ていました。この行事は昔から変わっていないと思います。

**一〇メモ** 八柱神社には、津島神社の祭神である牛頭天王ごす てんのうが祀られています。牛頭天王は夏越えの神で、古くから信仰されてきました。

## 11 変わってきた農業

—天道には畑や水田がありますが、以前の農業はどうなっているのですか？

現在の米作りは、田植えや稲刈りなどの作業は機械を利用していますが、以前は、人の力による作業がほとんどでした。

昔の田植えは、まず田おこしをするのですが、耕運機やトラクターが無かったので人力や牛を使っておこしました。また、畦あぜにはモグラやアメリカザリガニが穴をあけるので、水漏れ防止用に土でふさぐ作業が必要でした。

苗作りもそれぞれの農家が田の片隅で行いました。田植えの作業は、田植機がなかったので全て手植えて行っていました。早く終わるにはマンパワーが必要で、「手間替わり」といって近くの方や親戚同士が互いに手伝い合って作業しました。学校には農繁休暇があり、子供たちは田植えを手伝ったものです。子供の主な仕事は、大人が田植えをしている田に縄で束ねた苗を畦から必要な量を放り投げることでした。

田の草取りは、除草剤ではなく人力や歩行式草取り機で行いました。畦の雑草刈りは、鎌による作業でした。

稲刈りも鎌による作業でした。手伝いの子供は稲刈りばかりだと飽きてしまい、イナゴとりをして遊んでいました。とったイナゴは母が料理しておかずとなったものです。刈り取った稲は田にハザと呼ばれる木と竹を組み合わせた柵に掛け乾燥させた後、足ふみ脱穀機やエンジン付脱穀機で脱穀しました。

脱穀された米は、籾殻を取り除くトウスを所有している方に頼み、その作業を行った後、各家で米カンカン（ブリキ製）に貯蔵し、食べる米がなくなったら公会堂内にあった精米機（実行組合（現在の農事組合）所有で有料）で白米にして食べたものです。

米カンカンでの貯蔵は完璧ではなく、よくコクゾウと呼ばれる虫が沸き、米が食べられなくなりました。

脱穀で出た籾殻は、三角錐に積み上げ火を入れて灰にして畑の肥料にするのですが、サツマイモを入れておくとおいしい焼き芋ができ、それも楽しみの一つでした。

現在とは比べようのないほど多くの工程と多大な労力を要していたことがわかります。でも、家族や近所の方との共同による作業を行わなければ米作りはできなかったのも、人とのつながりができました。

## 畑作業

トイレはくみ取り式が大半であったため、尿や大便是畑の肥やしとして活用されていました。畑に肥溜めがあり、遊びに夢中になっていた子供が落ちて、たいへんな目に遭ったということもありました。

サトウキビは、かじると甘く貴重なおやつとなっていました。また、サツマイモやスイカを自家消費と現金収入を得るため、多くの農家が栽培していました。

大豆栽培は、自家製味噌をつくるのに必要でした。

二毛作での小麦栽培もしていました。穫れた小麦をうどん屋に持っていくと小麦券と引き換えてくれました。この小麦券を食べるのに必要な枚数を持っていくと、うどんに交換できました。

昭和30年代になると経済が右肩上がりになり、農業も農機具の導入、化学肥料や防虫剤など経費が増えるのですが、農業所得が減少し専業農家が減って、会社勤めの兼業農家が増えてきました。また、天道への移住者が増加し、農地（畑）が住宅地に変わっていきました。

さらに昭和40年代には、耕地整理、農水路整備、平成16年度のパイプラインの設置工事により、作業がとても楽になりました。農機具も人力による鎌、鍬、備中や馬牛などの畜力が、耕運機、脱穀機から田植え機、トラクタ、コンバインなどの、より便利な動力機械へと変化してきました。また、稲ができると田んぼで刈りとった稲を乾燥させ、脱穀、粃摺りという作業があったのですが、現在は、コンバインで稲を刈ったらすぐに農協のライスセンターで玄米に加工してくれるようになりました。



ビクをかついで畑仕事

**一〇メモ** 昭和20～30年ごろにかけて牛が田植え前の田おこしやしろか代掻きに使われました。農家にとっては、大切な存在でした。

また、卵を食べるために10羽程度のニワトリを飼っている家がありました。狭い小屋飼いと放し飼いがありましたが、卵を産まなくなるとつぶして（殺して）カシワ肉として料理の材料にしました。

## 12 ちょっと昔のお話

—その他の生活はどうなっているのだろうか。Sさんに聞いてみまし。



郵便局から猿投洋裁学院

これは今は亡きKさんがお元気の時、私の母から聞いた話です。Kさんは、下古屋のおおだな大店のあぶらや油家から嫁入りした方で、若い時には美人で竹下夢二のモデルにもなったそうです。S家は、家業の特定郵便局が昭和36年（1961）頃に東畑へ移転してからは玄関先で郵便切手等の販売を行っていました。

**一口メモ** S家は、江戸時代に内藤家が拵母藩の領主として入城した時、天領時代の代官屋敷の後を引き継ぐかたちで屋敷に入られ、想像では内藤家とは姻戚関係があったと思われます。

明治初期には小作からの年貢米で酒造免許を取得し、酒作りをしていました。その後は特定郵便局を行う事になり、酒作りはKさんの実家である浦野家(菊石)に引き継がれて行きます。

現在の柴田屋の道路より少し高い処に、あずまやがありました。このあずまやは元々は江戸時代にS家に来客する拵母藩役人、藩士、その他客のお供する付侍、付人、駕籠担ぎの控え所(待機所)であったようです。

**一口メモ** 四郷郵便局は明治13年（1880）4月1日に開局。初代郵便局長は杉浦仙八。明治42年（1879）6月1日に猿投郵便局と名称を変更しました。取扱業務は、郵便、為替、貯金、電信、電話、保険でした。集配区域は猿投村と保見村、西中山でした。昭和3年（1928）5月に電話業務開始。加入者は猿投保見石野地区で37名でした。その後四郷交差点（現在の鈴木耳鼻科）に、平成年代に現在の豊田北郵便局へと変遷しました。

## 13 こわかった災害

—このところ、天道では大きな災害がありませんが、以前はどんな災害があつ のだろうか。おばあさんに聞いてみまし。

### 伊勢湾台風

私が小学生だった時に伊勢湾台風がやってきました。昭和34年（1959）9月26日から27日にかけてのことでした。それは、とても怖かったです。東海地方を襲い、特に名古屋市では高潮による被害が大きく、5,000名以上の死者が出ました。瞬間最大風速は50mにも達したそうです。26日の夕方から風雨が強くなり、当時はテレビがなく、ラジオを聞いて台風が通り過ぎるのをじっと待っていました。あとで聞くと、1時間に60～70mmの大雨が降り、家族で土蔵



伊勢湾台風の被害

に避難し、一夜を明かしました。翌朝、外に出てみると風は強かったものの青空がまぶしかったのを覚えています。倒れた家や木があちこちにあり、我家の中は水浸しになってしまいました。床下浸水した家もありました。近所のAさんの家は2階の部分が無くなっていました。また、Bさん宅は強風で家が倒れてしまいました。

中央保育園は翌日が運動会だったのですが、それどころではありませんでした。大木が園舎に倒れ、壊れてしまいました。また、電線があちこち切れて、電気がくるのに1週間ぐらいかかりました。それまではろうそくで過ごしていました。

そのうち、全国から集まった救援物資が自衛隊の人たちによって届きはじめました。見知らぬ人たちの助けをくださる気持ちがありがたかったです。

猿投町では、家屋倒壊などによる死者が6名、重軽傷者149名、家屋の全壊が317戸でした。

## 4 7 災害

---

昭和47年（1972）7月12日夜半から13日未明にかけて大雨が降り、小原村では32名の犠牲者が出ました。天道でも側溝から水があふれ、道路を流れていました。S商店にも水が入ってきました。近くの藪には大きな水路がありましたが水があふれていました。下古屋集落の西あたりは、籠川堤防が決壊したことによる水がごうごうと流れて県道が通れなくなっていました。天道は、高台にあったのでたいした被害は出ませんでした。水道が使えなくなったので、給水車がきて、水をもらいました。

現在の井上公園プール付近には、水無川（水無瀬川）の水が流入する通称「どしゃ」という池があって、その北側は大水で家が浸かったようです。47災害後に小原や藤岡から天道に転居してきた方もいます。

天道は高台の洪積台地に位置しているので災害に強かったです。昭和20年（1945）に三河地震があったものの、それ以後は大きい地震は昭和45年（1970）に震度4の福井地震がありましたが、被害は聞いていません。

雷の被害は、たびたびありました。雲龍寺本堂裏の杉が雷に打たれて燃えたり、電柱の変圧器に雷が落ちて、よく停電になったものです。TVや電話機、エアコンが壊れたこともありましたが、天道で火事になったことは聞いていません。

## 14 新しい文化の創造

—おじいさんやおばあさんのお話を聞くと、みんないろいろと工夫して生きてき ことがわかりまし 。これからは僕 ち私 ちの時代。これからの天道はどうなっていくのだろうか。世の中が変化すると、天道も大きく変化するだろうね。

今、世の中がどんどんと変わろうとしています。近い将来、次のような世界が来るのではないのでしょうか。

- ・交通 ドローン技術が向上して、空飛ぶ乗り物ができる。
- ・エネルギー 水素や太陽光発電が主流となり、脱炭素エネルギーとなる。
- ・家庭 核家族が進み、家が小さくなる。
- ・教育 個別化教育がすすみ、学校の登校日数が減る。
- ・食事 人工肉が向上し、自然ではない食べ物が主流になる。
- ・巨大地震、火山の噴火、異常気象などの災害が起きる。
- ・地球温暖化で、日本が熱帯化する。
- ・コロナをはじめとするウイルスなどによって、健康が脅かされる。
- ・日本人と外国人というような考えではなく、地球規模での生活として考えるようになる。
- ・日本人住民の高齢化が進み、福祉の充実がより求められてくる。
- ・日本人の減少が進む一方、外国人居住者が増えてくる。

—未来のことだから、分からないことばかりですが、これからも大切にしていき いことは、どんなことでしょうか。

これは天道に限ったことではありません。現在の天道は、トヨタ自動車を中心とする産業の中で住民が生活してきました。そのため、会社勤務中心の生活や車社会文化によるところが大きかったわけで、天道の地域社会もどんどん変化してきたわけです。

今後も、生活が変わっていくことが予想されるわけですが、大切にしていきたいことは次のようなことではないでしょうか。

- ・人のつながりを大切にする

人は一人では生きられません。社会のしくみそのものが、見知らぬ人々とつながっているわけで、仲間意識を大切にしながらの心のつ

ながりを大切にしていくなが必要があるのではないのでしょうか。

そのために、お金でという物差しではなく、ボランティア精神を中心とした助け合いの精神を中心とした文化の創造が必要になってくるのではないのでしょうか。

- ・ 助け合う人たちがあふれる天道
- ・ 古き文化から新しい文化を創造する天道

さて、50年後の天道はどのようになっているのでしょうか。未来を創るのは、あなたたちです。



## おわりに

こうやってちょっと昔の生活を振り返ってみますと、現在のように便利ではなかったことがわかります。しかし、不便であったからこそ、家族や近所の人たちの協力が必要であったのではないかと思います。それに引き換え、現在は「隣は隣」ではありませんが、個人や各家庭を大切にすることが当たり前になってきました。必要がなくなったといえはそれだけです、それでよいのでしょうか。

昔のことを思い出し、地域での生活は、人とのつながりがあることこそが大切だと、私たちは実感します。人のつながりは、家族や知人ではなくても今後の時代には大切なことだと思います。「人はみんなつながっている」の精神で今後も感謝の気持ちを持ち続け、よりよい地域にしていきたいものです。



### 編集委員

杉浦 基之

福谷多年子 柴田 和則 加藤廉一郎 山内 茂昭 加藤 順子 小栗 一夫  
山本千枝子 渡邊 仁司 今井 菊男 大地 幸次 加藤 康博

この冊子は、天道自治区HPからもご覧になれます。  
<http://tendoku.sakura.ne.jp/>



天道自治区HP

---

---

## (四郷)天道ってこんなところ 「ちょっと昔の生活や文化」編

天道諺言伝え編集委員会  
令和3年度井郷わくわく事業

連絡先 天道自治区  
愛知県豊田市四郷町天道 45-230  
TEL 46-6070 FAX 46-6070  
Mail [tendouku@spice.ocn.ne.jp](mailto:tendouku@spice.ocn.ne.jp)  
URL <http://tendoku.sakura.ne.jp/>

発行日 令和4年(2022年)2月2日

印刷所 サナゲ印刷株式会社  
愛知県豊田市四郷町天道8  
TEL 45-0081 FAX 45-1861

---

---